

保育論のことば考

——『遊び』を例に——

「子どもにもっと自由を与えよう」「子どもは十分に遊ばせてやるべきだ」「子どもの遊びの指導こそ保育者の重要な課題の一つである。」

これは多くの保育者の共感を受ける主張であらう、異議となえる人は少ないはずである。これは保育の「常識」であり、保育者のいわば「良識」にあたることだからである。

では、当の子どもたちはこの主張をどう受けとるだろうか。子どもたちは自らの立場を主張しえない。そこで、子どもを親しい友人に見たてて、先の主張を語りかけてみよう。

「君たちにもっと自由を与えよう！」というように。誇り高きわたしの親友ならきっとこう答えるだろう。

小川 博久

「大きなお世話だ。自由とは他者から与えられるものではない位、君も先刻、御承知のはずではないか。君の云い草は啓蒙専制君主が従僕に云うことばそのものだ。わたしは君と同様、独立した個人(individual)分割できない存在」として自分のことは自分で決めたいのだ、つまり、わたしはわたし自身の主人でありたいのだ。だからこそ自由を求めるのではないか。」

「また君はわたしを『遊ばせてくれる』という。しかし、『遊ぶ』ということばを使役的に使うと、どういうニュアンスが生ずるか考えたことはあるかい。『泳ぐ』ということばを『もう少し泳がせてみるか』というように使役的に使うの

と同じなのだ。これは刑事が容疑者の行動を監視するとき云うことばだ。もしかりに君がわたしを『遊ばせてくれた』としても、わたしはきつと『遊んだ』とは思うまい。操られたとしか思えないだろう。」

「そんなわけで、君が『遊び』を指導するといっても、わたしは当惑するばかりだ。いったい君はわたしになにをしたいのだ。わたしが『遊ぶ』のはわたしがそうしたいからであり、どこでだれとどんなふうに『遊ぶ』のかを決めるのはこのわたしなのだ。わたしが決めるから楽しいのだし、楽しいからわたしが決めるのである。」

「あるいは、君はわたしの知らない『遊び』をわたしに教えてくれようとしているのかもしれない。でもそれは、君の知っている『遊び』の知識や技能を教えてくれようとしているのであって、『遊び』を指導しているのではないんだ。なぜっていくら『遊び』をよく知っていても、遊びたくないものだったら、遊ばないからね。どだい『遊び』などというものは、指導できるものではないのだ。それは生まれてくるもの、湧きあがってくるものだよ。」

「もし君がそれほどわれわれの『遊び』に関心をもち、『遊

び』がわれわれにとって大切だと思ふのなら、われわれの『遊び』の仲間になることさ。君はおもしろいやつだ、君といると楽しくなると思えば、いつでも仲間に入れてやるぜ。」もし友人のこのことは幼児の反応として受けとったら、保育者はどうしたらいいのだろう。もう一度こう自らに問い返さねばなるまい。

「わたしにとって『自由』とはなにか、今わたしは自由を求めているか」

「わたしにとって『遊び』とはなにか、今わたしは『遊び』をエンジョイしているか」

「どうしたら幼児たちと『遊び』を共有できるか」

この問いに答えることは、すぐできることではなさそうだ。子どもたちとのつきあいの中で日々自問自答しつづけることではないだろうか。そしてルソーが「エミール」の中で、ホイジנגが「ホモ・ルーデンス」の中で、カイヨワやフィンクやアンリオが問いかけたのも同じような問いであったような気がするのである。

(東京学芸大学)